

有明海干潟堆積物の堆積年代推定

Estimation of depositional age from Ariake tidal flat deposits

市原 季彦 [1]; 下山 正一 [2]

Toshihiko Ichihara[1]; Shoichi Shimoyama[2]

[1] 復建調査設計 ; [2] 九大・理・地球惑星

[1] Fukken Co.,LTD.; [2] Earth and Planetary Sci., Kyushu Univ

<http://geoslicer.com>

干潟等沿岸域堆積物を用いて環境変化等を調べる上で、試料の堆積年代を検討することは重要である。特に、過去100年間ほどを対象とした調査になるため、Pb210, Cs137などが用いられる。しかし、多くの場合、生物擾乱が著しいため、年代決定には注意を要する。

有明海沿岸は、1792年に雲仙眉山の崩落に伴う津波に襲われている。その津波堆積物は、これまでに荒尾、川副沖などで見いだされている。今回、新たに柳川においても津波堆積物らしいイベント性堆積物を見いだすことができた。柳川における津波堆積物は、より深い古水深を示す貝殻遺骸で特徴付けられるが、堆積構造等は認められない。

有明海沿岸域は、アサリ漁獲量減少に伴って、覆砂を投入している。覆砂は異質なものであり、干潟とは明らかに異なる環境下の生物遺骸を多く含む。漁場での調査では、この覆砂を避けることは困難である。しかし、覆砂はその時期が特定できるため、地層中から覆砂層（覆砂相）を見いだす事によって、堆積年代の指標になると同時に覆砂前の環境状況と覆砂後の状況を知ることができる。

堆積構造が残されていない異質なイベント性堆積物として、津波堆積物や覆砂層を識別するには、構成物である生物遺骸を調べることがもっとも容易である。これらのデータに加えて他の年代推定手法を加えることによって精度の良い堆積年代の推定を行うことができる。